



八女上陽の「ひふみよ橋」を守る会 寄口橋架設100年祝う



「100年記念橋渡り」で宮司に続き寄口橋を渡る参加者
＝福岡県八女市上陽町、2021年2月28日 中村まさあき撮影

福岡県八女市上陽町を流れる星野川に架かる4橋の石造アーチ「ひふみよ橋」。上流から順に単一アーチの洗玉眼鏡橋、2連の寄口橋、3連の大瀬橋、4連の宮ヶ原橋とアーチの数が一つずつ増えることから4橋の総称となっている。

2012年の九州北部豪雨で被災。その後は治水の観点から石橋は川の流れを妨げる障害物と見なされた。しかし石橋の復旧・保全を望む住民が「八女上陽の『ひふみよ橋』を守る会」を結成し、石橋保全を行政へ陳情。話し合いにより八女市は、宮ヶ原橋周辺の河道を拡幅し「ひふみよ橋」の復旧・保存を行うこととした。被害が最も大きかった宮ヶ原橋も18年に復旧し、同年には大瀬橋架設100年記念行事が同会主催で開催された。

20年7月に寄口橋も架設100年を迎えたが、コロナ禍により記念行事は延期され本年2月28日、感染防止対策を講じ開催された。

記念式典で主催者あいさつをした久間正会長は、「皆さんと石橋架設に携わった先人たちの思いを共有し、石橋を文化遺産として次世代にどう残すかを一緒に考える機会にしたい」と話した。式典に

は85人が集まり、寄口橋架設工事の石工棟梁・山下佐太郎のひ孫と大工棟梁・小川弥四郎の孫が参加。来賓の八女市長・三田村統之氏が祝辞を述べた。

神事後、100年記念橋渡り、和太鼓「童衆」による記念演奏、八女市文化財専門員会会長の馬場紘一氏による寄口橋に関する説明に続き、「ひふみよ橋」を守る会の活動報告がなされた。続いて九州産業大学名誉教授の水田洋司氏が登壇し、「洗玉眼鏡橋の現況」と題した記念講演が行われた。同橋は壁石のふくらみと路面のへこみが懸念されていることから、現地へ移動し水田氏と馬場氏から説明が行われた。(2面に関連記事)

その後、参加者は「ホテルと石橋の里公園」へ歩き、洗玉眼鏡橋架設時の親柱や高欄を見学。最後に同公園内で八女石灯ろう協同組合による「ミニ石橋づくり」を体験。記念イベントは閉会した。

100年前はくしくもスペインかぜ(インフルエンザ)の世界的大流行の時期と重なる。コロナ禍にある現在、清流に架かる「ひふみよ橋」を眺めていると、先人たちが乗り越えた苦難と地元発展への願いに思いが及ぶ。(広報部)

中面の案内

2面 洗玉眼鏡橋の現況

4面 「石工の里櫟野歴史保存会」の活動

3面 「中国の古橋」撮影記その5(榊 晃弘)

6面 「温故石拱記」岩永三五郎・玄冬編(土塚尚孝)

寄口橋架設100年記念講演では、九州産業大学名誉教授の水田洋司氏が洗玉眼鏡橋の壁石のふくらみと路面のへこみについての調査を紹介し、損傷拡大を懸念した。(1面に掲載) 以下に八女市文化財専門員会会長の馬場紘一氏による同橋の概要説明を織り交ぜ、同橋の懸念される状況を紹介する。

「矢部吹上兄弟橋」と刻銘

八女市上陽町を流れる星野川に架かる洗玉眼鏡橋は、橋長32・5㍎、幅員5㍎、径間22・5㍎で、水面からのアーチの高さは10㍎。49列の輪石で構成され、拱厚は0・85㍎ある。

現地で案内役を務めた馬場氏の調査によると、要石下部には「肥後上益城 八代種山 棟梁橋本勘五郎/倅源平/孫為八/矢部吹上兄弟橋」と文字が刻まれ、橋本勘五郎の子と孫が架設に加わっていたことが分かったという。勘五郎(丈八)が石工副頭を務めた水路橋「通潤橋」(熊本県上益城郡山都町)旧矢部手永は、別名で「矢部吹上橋」とも呼ばれたことから、洗玉眼鏡橋は



「はたと石橋の館」前ウッドデッキの特設会場で講演する水田洋司氏(九州産業大学名誉教授)

通潤橋の兄弟橋とされたようだ。
過去に豪雨や事故で損傷

2012年7月の九州北部豪雨の際は一瞬、川の水が洗玉眼鏡橋の路面を洗うほどの高さまで増水した。流木やがれきが輪石や壁石に衝突したが、石橋は崩落することなく持ちこたえた。

同橋の架設年は1893(明治26)年

と星野川に架かる「ひふみよ橋」の中では最も古く、工法は石材の接合部にモルタルなどの凝固剤

洗玉眼鏡橋の損傷拡大か 県道橋の振動伝播が影響

を使用しない空積みである。大正期に架設された寄口橋、大瀬橋、宮ヶ原

凝固剤が使用された練積みで、宮ヶ原橋には壁石の内部にコンクリートが打設されていることが被災により判明し、空積みよりも橋体が壊れにくい構造であることも分かった。

洗玉眼鏡橋を川の上流側から見ると、左岸側の壁石と輪石に亀裂がある。それについて馬場氏は、同橋の路面を自動車が行き交っていたおよそ70年前、橋

上からバスが転落する事故が起これ、壁石や高欄などが崩落。上流左岸側の壁石が損傷したため布積みで修復された。その修復された箇所にも亀裂が発生したが、その後は亀裂が拡大しているように見えないという。

路面と壁石の変形が関係

水田氏は、同橋の路面のへこみと壁石にふくらみが見られることを懸念している。3次元レーザースキャナーで計測したところ壁石に

最大11㍎のふくらみがあり、路面の245地点で水準測量を行ったところ最大4・5㍎のへこみを

計測。さらに壁石のふくらんだ箇所と路面のへこんだ箇所が関連していることが判明した。石橋のすぐ上流側には県道52号線が通る鋼橋(洗玉橋・鋼桁+鉄筋コンクリート床版)が架かっている。水田氏は「隣接する県道橋を走行する車の振動が石橋に伝播し、石橋内部の土砂が移動したことで路面のへこんだ箇所の体積が壁石のふくらみとし

て現れた」と仮説を立てた。そしてそれを実証するため、現地であらゆる振動の計測を行った。

壁石のはく落につながる

計測の結果、県道橋を車が通過するたびに石橋への振動伝播が判明。路面がへこんだ箇所では、振動を地震の揺れに換算して2メートルで震度1、



洗玉眼鏡橋の上流側に県道橋(左端)が架かっている
石橋の左岸側の壁石に亀裂とふくらみが見られる

6メートルで震度2程度の揺れが石橋に伝わっているという。「このまま放置すれば将来、壁石がはく落する可能性がある。そのため、さらなる原因解明と揺れの伝播を緩和する方策を考察する必要がある」と水田氏。

指摘を踏まえ、洗玉眼鏡橋を次世代に残すため、われわれに何ができるかを検討する必要があるようだ。また、石橋に隣接して新橋を架設する際に考慮しなければならないこととして、振動伝播の影響の周知が望まれる。(広報部)

写真提供/中村まさあき

※記念講演の内容は、2014年度の土木学会西部支部研究発表会での平成24年7月の九州北部豪雨とひふみよ橋と題した講演と、2017年に土木構造物・材料論文集33号に掲載された「洗玉眼鏡橋路面の凹みと壁石の膨らみ」を基に再構成された。

農家民宿に泊まり取材

今回は中国各地を回って印象に残った宿についての話です。風雨橋の多い浙江省麗水市の月山村を訪れた雨の日、旅行トランクを引いてでこぼこのあぜ道をおよそ150分歩いて着いたのは、水田の中に建てられたコテージ風の宿でした。モルジブの美しい海に群立す

「中国の古橋」撮影記 その5

神 晃弘 (福岡県)



月山村の水田コテージ
＝中国・浙江省麗水市

写真提供／神 晃弘

的な大合唱に朝まで悩まされました。貴州省荔波県瓮所村では村に一軒だけの農家民宿に初めて泊まりました。老夫婦、若夫婦と2歳ぐらいの男の子の5人家族とのことですが、若い主人は温州市へ出稼ぎに出て留守でした。豚と鶏を飼っていて、鶏は放し飼いです。翌朝のこと、食堂とされた土間の

低い丸テーブルで、子ども用の小さな木製椅子に辛うじて腰かけて食事をしていたら、2羽の鶏が突然大声を發して飛び込んできたので、びつくり仰天しました。多分、犬に追われたのでしょうか。戦時中、田舎に疎開していた子ども時代の記憶がふとよみがえってきました。

る有名なコテージは知っていますが、まさか水田コテージに泊まるとは…。部屋は個室で、ベッドにトイレ、シャワーはもちろんそろっていました。ところが夜が深まるにつれ、カエルの大歓迎を受けることになったのです。5月末の田植えのとき。窓、壁、天井、床の隙間から絶え間なく聞こえる立体

のようですが、「お土産品を大量購入し、出稼ぎ先の町の情報を口コミで田舎へもたらし、その結果、村での起業を促進する」目的のようです。要するに経済の活性化が狙いで、農家民宿もそうした政策により生まれたのかもしれない。農家民宿は中国で取材をする際にありがたい存在でした。(次号に続く)

通潤橋(熊本・山都町)放水の雄姿。熊本地震に続く豪雨被害の修復を終え2020年7月、4年3カ月ぶりに記念放水が行われた
写真提供／大塚光一



理事 大塚光一(兵庫県)

地方では高齢化や人口減少が急速に進行しています。地方創生は国の喫緊の課題となり、各自治体は経済振興の面からも地方を訪れる人(交流人口)を増やす方策を模索しています。

熊本・山都町出身の私は、故郷へ恩返しをしたいと思う中で日本の石橋を守る会に入会しました。石橋はコロナ禍以前から老若男女、インバウンド(訪日外国人)にとっても魅力的なものとして認識されていたと思います。九州には全国の石橋の8割が集まっていることから、石橋は九州が誇る地域資源であると言えます。

本会のアピールの仕方によつては石橋を地方創生の起爆剤にできるのではないのでしょうか。自治体に対し石橋を地域資源として生かすよう提案し、ネ

空撮動画で石橋の魅力発信



霊台橋(熊本・美里町)の空撮動画
「JAPAXちゃんねる」サイトの日本の石橋を守る会PR動画より

ットを活用して不特定多数の人から資金を調達するクラウドファンディングの活用などがアピールのポイントとなると考えます。
また、石橋の新たな魅力を発信することも必要です。それには小型無人機「ドローン」の活用が有効に思えます。私が経営する建設コンサルタント会社ではこのほど、動画投稿サイトに本会のPRとして石橋の空撮動画を投稿してみました。「ユーチューブ・ジャパン」で「JAPAXちゃんねる」と検索するか、スマートフォンで下のQRコードを読み取ってアクセスしてください。



石工の里櫟野^{いちの}歴史保存会 〓 福岡県大牟田市

櫟野石工の足跡を丹念に調査

溶結凝灰岩「櫟野石」の産地、福岡県大牟田市を拠点に江戸期から昭和期にかけて活動した櫟野石工集団。多くの神社の鳥居や灯籠、狛犬などに名を残すが、今はその存在が忘れ去られようとしている。櫟野がかつては石工の里であったことを後世に伝えようと「石工の里櫟野歴史保存会」が結成され、2013年から地道な活動が進められている。保存会の前原八寿之氏と岡村康氏に櫟野石工とその顕彰活動について聞いた。(広報部)

写真提供／中村まさあき



中央の祠が玄翁和尚を祭る「石神さん」。左が前原八寿之氏(74)、右が岡村康氏(74)



櫟野地区最後の石切場跡



石神さんの祠に刻まれた碑文

櫟野石工の足跡を訪ね調査

「櫟野には江戸時代より昭和にかけて多くの石工集団があり、代々その技術が受け継がれてきました。」

右は福岡県大牟田市櫟野の櫟野諏訪神社境内に2013(平成25)年、「石工の里櫟野歴史保存会」によって建立された「石神さん」の説明板の文の冒頭。地元では玄翁(げんのう)和尚を祭る石の祠(ほこり)を石神さんと呼ぶ。

会長の前原八寿之氏は「昔はいたるところにあった櫟野石の採石場は全て稼働が停止して、今は石神さんも忘れ去られようとしている。櫟野がかつて、石工の里として知られたことを多くの人に知ってもらいたいと、共に石工を先祖に持つ6人で会を立ち上げた」と思いを語る。

保存会は櫟野石工の活動を調査した郷土史研究家、佐藤和四郎氏(故人)の記録を手掛かりに2013年から、石造物



早鐘眼鏡橋(国指定重要文化財)



陣屋眼鏡橋



岩本橋(熊本県指定重要文化財)

や採石場、石工の系譜や師弟関係などの調査を進め、2020年11月に調査内容をまとめた冊子「石工の里櫟野」(非売品)を制作し、地元の図書館や小中学校に寄贈した。

溶結凝灰岩が堆積した櫟野

江戸時代の櫟野は肥後・熊本城下と筑後・三池陣屋を結ぶ三池往還沿いの石工の里だった。肥後との国境を流れる関川に架かる2連アーチの「岩本橋」(熊本県荒尾市上井手、県指定重要文化財)を渡って北へ1きほど行くと道は櫟野峠に向かう。その周辺にはおよそ9万年前の阿蘇カルデラ噴火の火砕流が固まった溶結凝灰岩(Asol4)が厚く堆積した地層があり、そこから産出する石材は「櫟野石」と呼ばれた。

櫟野石の地層は表層土の下5〜10cmにあり、上から順に「だく層」「硬い凝灰岩層」「細工石層」「低石層」「最低石層」の

5層に分けられている。用途に合わせ各層の石材は、神社の鳥居や灯籠、狛犬、記念碑、墓石、土木建設用資材などに幅広く利用され、櫛野石は国指定重要文化財「早鐘眼鏡橋」(大牟田市合成町)や「陣屋眼鏡橋」(同市新町)、岩本橋などの石橋にも使用された。そして櫛野石工は、筑後地方から熊本県北部にかけて広く活動したことが分かっている。

明治末に櫛野石工組合誕生

堂面川に架けられた陣屋眼鏡橋(橋長8・7㍎、橋幅4・26㍎、径間7㍎)には、下流側の要石に「幸兵衛／伊三良」、要石から左岸側へ4列目の輪石には「櫛野石工棟梁金兵



陣屋眼鏡橋の輪石の文字

工／棟梁脇幸兵衛／伊三良」と文字が刻まれている。石工の里櫛野歴史保存会の調査によると、

「金兵衛」「幸兵衛」「伊三郎」の3人は各所の神社に灯籠なども残している。1890(明治23)年になると幸兵衛の子、石丸幸一を發起人に櫛野石工28人が世話人となり、櫛野地区を見晴らす櫛野峠の高台に「石神さん」を建立した。石工衆のリーダー的存在となった幸一は、190

8(同41)年に櫛野石工組合を立ち上げ、石造物の価格を安定させることに尽力して櫛野石工繁栄の礎を築いた。

玄翁和尚を祭る「石神さん」

石工が石を割る際に使用する道具ゲンノウ(金うち)は、「石神さん」に祭られた玄翁和尚の名に由来する。和尚は南北朝時代に天皇から大寂法翁国師(だいじやくほうおうこくし)の号を賜った曹洞宗の名僧で、能登(石川県)の生まれといわれ、名は心照空外(しんしょうくわがい)。福島県喜多方市の示現寺に墓があ

「石工の里」の歴史顕彰へ

るとされる。石の祠には「石神さん碑文」として3面にわたって玄翁和尚を祭る理由となった物語が漢文で刻まれている。

その物語は能の演目「殺生石」として知られ、「玉藻の前(たまものまえ)」と呼ばれる絶世の美女に化けた九尾のキツネが登場する。インドや中国で国を傾けたこの妖狐は、平安時代の日本にやって来て鳥羽上皇に寵愛される。すると上皇は病気に。そこで陰陽師が病魔退散の祈禱を行う。すると玉藻の前はたちまち苦しみ、魂が抜けて海山を越え、那須野の原まで飛んだという。そこへ討手が放たれる。妖狐は追い詰められ、ついに矢に

射貫かれて那須野の原に露と消えた。ところが、その執心だけは毒を吐く石となつて道行く人々をとり殺したので、その毒石は「殺生石」といわれた。ある日、玄翁和尚が殺生石の傍らを通りかかる。和尚はそのいわれを知って妖狐の魂に哀れを感じ、石を砕いて成仏させた。

石神さん碑文には最後に次のように記されている。「このごとき因縁をもつて石を穿(う)が(つ)鉄器に玄翁の名あり。ゆえに石工は、翁を祭神として祭るなり。ここに本村の石工の志の機因あり。發起人石丸幸一、本村の石工共に議して

おのの心果を一致するに至る。ついで明治庚寅(かのえとら)の秋、かくの如く石像を刻み勧請(かんじよう)し写す。毎年正月七日を祭日とする」(祠の原文を現代文に読み替え)

石工衆の棟梁たちは毎年、玄翁和尚の命日とされる1月7日に櫛野を見下ろす高台にあつた石神さんに集まり、平安無事、豊穰などを祈つたとされる。

しかしその高台の場所は共有地で、土地が売却されたために、1955(昭和30)年に石神さんの祠は現在の櫛野諏訪神社境内に移された。

石工の系譜たどり調査

石工の里櫛野歴史保存会は、櫛野石工のシンボルである石神さんに石碑と説

明板を設けたほか、採石場だった場所の調査も行った。大牟田市の土穴・唐黒・新道・鳥越・亀ノ土・黒尾地区の計19カ所に採石場があつたことが分かり、聞き取りにより各使用者も判明した。

櫛野石工組合に加盟する石工衆は最盛期に60人ほどいたようだが、1985年には1人になり、2010年前後を最後に採石も行われなくなり、採石場だった場所は山に埋もれ、一部は住宅地などになっているという。保存会はその最後の採石場(前原氏所有地)に「石切場跡」の石碑を建立した。

保存会では櫛野地区の玉川小学校内に同校創立130周年記念碑を櫛野石で製作し寄贈したほか、小学生が総合学習で地元の神社を巡る際に案内を引き受けるなど、「石工の里櫛野」を顕彰する活動を行ってきた。前原氏は主催の生涯学習講座で「石炭だけでない! 大牟田・櫛野の石工の物語」と題した講演を行い、「ミニニフイMの番組にも出演。岡村氏も「石工の系譜と残した作品などについて今後も丹念に調査を続けたい」と活動に意欲的だ。

石工の里の歴史を後世に残す会の活動に期待したい。

※櫛野諏訪神社や石切場跡に駐車場はない
※参考文献／「石工の里櫛野」前原八寿之編、「櫛野石工とその石造物」(玉川小学校百周年記念誌より)佐藤和四郎著

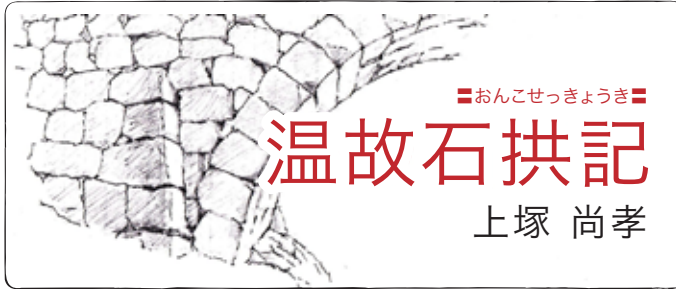
三五郎は 八面六臂か(玄冬)

岩永三五郎の晩年の代表作、甲突川(こつつきがわ)五石橋に関して取り上げたいことがある。それは各橋の基礎石の下に敷かれた梯子胴木のこと。西田橋解体復元工事で石工頭を務めた竹部光春氏(熊本県下益城郡美里町)から次の話を聞いたことを覚えている。

石造りの橋は重量があるため、経年変化で土台が沈下する可能性がある。それを防止するため、西田橋の基礎石の下には石材が2段積まれた護床敷石が敷き詰められ、その下に、水中では腐食しないマツ材を梯子状に組んだ梯子胴木が敷かれていたという。

薩摩に伝わった梯子胴木

五石橋の梯子胴木は、玉江橋が長さ6尺弱で、下のイラストの通り、丸太状のマツ材を貫板(ぬきいた)で組みそろえてある。新上橋は細いマツ材が田の字形に連続して組まれ華奢な感じ。それが西田橋になると橋幅の3・5倍ほどの長さの梯子胴木の上に護床敷石が敷かれ、敷石の上流部と下流部には傾斜が付けられており、橋の下を河水がスムーズに流れる工夫がしてある。



■おんこせきょうき■
温故石拱記
上塚 尚孝

高麗橋の梯子胴木は、西田橋に似た太いマツ丸太を長く継いだものが使用されている。武之橋は長さ約6尺の丸太が4本、その上に平板が載っている。

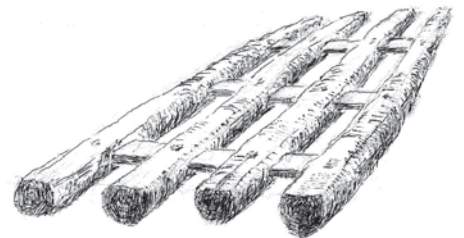
梯子胴木の使用は、いっどこで始まったのだろうか。肥後の八代海沿岸では文政年間、大規模干拓の先進地であった備前・児嶋郡(岡山県)から石工衆を招いて「七百町新地」(八代市鏡町)などの干拓工事が行われた。

三五郎は七百町新地造成では現場責任者(八代郡中石工共惣引廻役)に抜擢され、その工事の場に限り岩永姓を使うことを許された苗字御免の身分も得ている。こうした現場で梯子胴木の技術が備前から肥後に伝わり、後に三

五郎が薩摩へ伝えたのではないかと私は考えている。

名匠最後の架橋工事

薩摩で甲突川五石橋を架けた岩永三五郎は、肥後への帰り道、八間川に江之口橋(薩摩川内市)を架設して帰郷。その



玉江橋の梯子胴木

イラスト/上塚 尚孝
「平成6年度玉江橋外2橋現状調査測量業務委託報告書」(鹿児島市橋りょう建設課)掲載写真を基に作成

後は肥後の八代郡芝口村(八代市鏡町)で病気の療養をしたといわれていたが、三五郎直筆の資料は見ることがない。

1980(昭和55)年に本会の第1回大会が熊本県山鹿市で開催された折り、三五郎の縁故者である岩永米人氏が参加されていた。私は三五郎の資料がなぜ残っていないのかと尋ねたところ、火災で焼失してしまったのだそうだった。

ところが2011(平成23)年夏、農業経営の傍ら熊本大学に通って古文書研究をしていた会員の長井勲氏(故人)が、細川家伝来の美術品や資料などを所蔵する「永青文庫」が熊本大学に保存を委託した古文書の中から三五郎に関する記録を見つけたと知らせてきた。それは「新統跡覧(しんぞくせきらん)」という熊本藩の外交記録で、三五郎が紀州・和歌山藩に招かれて石橋1基を架設した事実が記されていた。永青文庫の閲覧に

(左面上に続く)

岩永三五郎の年譜 上塚尚孝編

※年齢は数え年(満年齢+1歳)

- 1793(寛政5)年 1歳
熊本藩領西野津村(八代郡氷川町)の石工・宇七の二男として誕生
- 1814(文化11)年 22歳
緑川の鵜ノ瀬堰(上益城郡甲佐町)と糸田堰(同町)築造
- 1816(文化13)年 24歳
氷川の薩摩堰(八代郡氷川町)補修
- 1818(文化15/文政元)年 26歳
柏川(かしわごう)用水路整備で肥後初の石造水路橋・雄亀滝(おけだき)橋(下益城郡美里町)架設
- 1819(文政2)年 27歳
干拓地に水を供給する麓川(ふもとがわ)用水路(八代市)工事に着手
- 1821(文政4)年 29歳
野津手永・七百町新地の干拓工事に限り苗字御免の身分に
- 1824(文政7)年 32歳
御船川の六嘉大堰樋門(上益城郡嘉島町)架設
- 1826(文政9)年 34歳
麓川用水路(八代郡氷川町)の六地藏谷、馬ノ神谷、松ノ本に水吐懸越(みずはきかけこし)、水路の立体交差 3基架設
- 1830(文政13)年 38歳
終身で苗字御免の身分に
- 1832(天保3)年 40歳
笹原川に男成川橋(現・聖橋、上益城郡山都町)架設
- 1833(天保4)年 41歳
千滝川に下馬尾川橋(現・浜町橋、同町)架設
- 1840(天保11)年 48歳
鹿児島藩に招請され石拱橋6基架設(吉

は許可が必要なたため長井氏は無許可で古文書を見たことを気にしていたが、「私が閲覧許可を申請するから」と、彼に原稿を依頼。その文は会報79号1面に掲載された。私は公益財団法人永青文庫の理事長・細川護熙氏(元首相)の許可を得て、その古文書が保管されている熊本大学附属図書館へ行き閲覧した。

岩永三五郎は大阪の商人、鴻池伊助(こののいけいすけ)の世話で養子の太蔵と小者の鹿吉をつれ、大阪經由で和歌山へ行き、紀州東照宮前の和歌浦(わかのうら)に石橋を架設した。その橋こそ今も現地に残る「不老橋」である。橋には見事な彫刻の高欄が設置されているが、その彫り物は地元の石工、忠兵衛の作だそう。

石工の仕事が「日本遺産」に

昨年6月、八代の石工の仕事ぶりが評価され、野津や種山の石工衆が残した石造物が日本遺産と認定された。肥後の石工衆の中でも岩永三五郎の仕事ぶりは際立ち、まさに八面六臂で多岐にわたる。活躍の場も肥後にとどまらない。私なりに年譜を作製したが、めがね橋だけでも超人的な数に上る。

本稿をまとめるためノートを見返していたところ、2002年1月に協和コンサルタントの関見氏から頂いた「薩

摩天保改革顛末書」なる一枚を貼り付けていた。

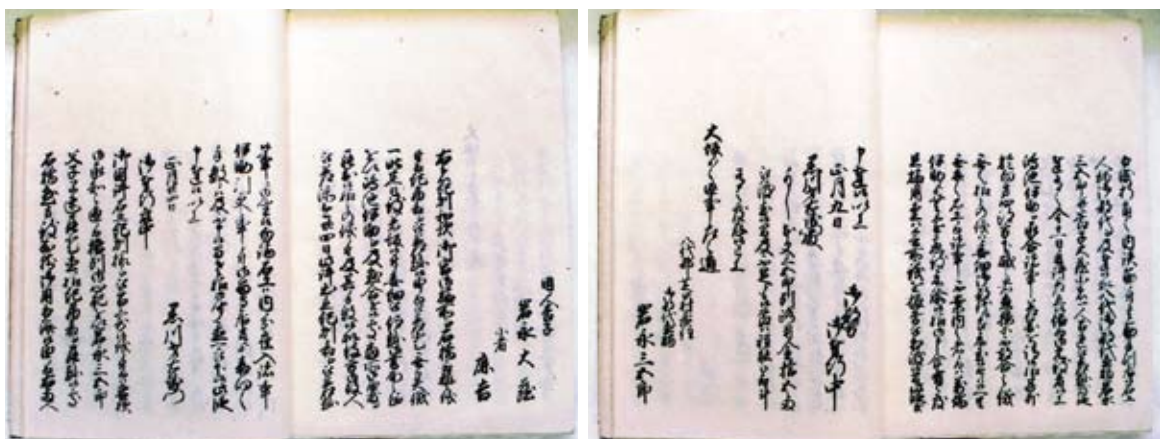
「村々山野の川に沿いたる所は、開拓を禁じ竹木を植えて修繕の用に供す可しと令したるは、沿川の開地は雨等に土砂を流失し、川床高くなり水害となる事なれば、後年に至り是を禁ず可し」と岩永が云いし事にて、其村々へ堅く禁じたる」

右の文からは三五郎の治水に関する意見が読み取れる。もし、その意味するところがしっかりと後世に受け継がれていたとしたら、1993(平成5)年の甲突川の氾濫「8・6水害」の被害はあれほど甚大でなかったかもしれない。岩永三五郎の代表作である甲突川五石橋は、今も川面にそのアーチを映していたかもしれないと思ってしまうのである。

(2020年11月14日記 完)

※参考資料／「がごしま西田橋」木原安妹子ほか(南方新社)、「西田橋 移設復元」鹿児島県土木部計画課、「平成6年度玉江橋外2橋現況調査測量業務委託 解体調査報告書」鹿児島市橋りよう建設課・(株)建設技術コンサルタンツ、熊本大学文学部附属永青文庫資料 歴史資料編・古文書「新統跡覧」、「干拓のあゆみ」戸田市治

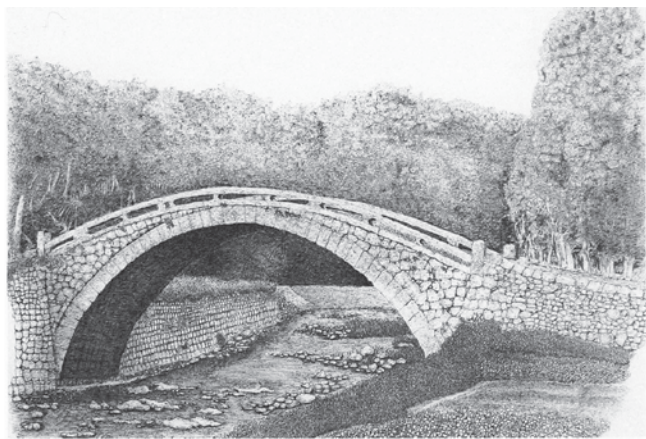
※岩永三五郎の甲突川石橋群架橋に関しては、本会第2代会長の片寄俊秀氏の著書「歴史的文化遺産が生きたまち」(1995年、東京堂出版)の論考がいい。また、同氏が本会第40回大会のためにまとめた冊子「アーチ石橋に魅せられて」にも収録されている(在庫少々)。



岩永三五郎没年の活動が記された細川家の外交記録「新統跡覧」(公益財団法人永青文庫所蔵)

※年譜の参考資料／公益財団法人永青文庫所蔵古文書「町在」、「布田家文書」、「調所広郷履歴」写し、「海老原清照履歴概略」写し、「鹿児島県維新前土木史」、「御産物御仕登金銀銭御蔵納高萬控」、「大口市誌」、「芝山区郷土誌」

- | | |
|--|---------------------|
| 野橋、行屋下橋、孝行橋、蛭子下橋、潮見橋、境橋 | 1841(天保12)年 49歳 |
| 鹿児島港の旧石積防波堤(東風除岸岐、別名を三五郎波戸)築造、甲突川整備(川幅統一、堤防護岸、河道掘削) | 1842(天保13)年 50歳 |
| 熊本に一時帰郷して印鑑(いんにやく)神社(八代市鏡町)再建工事監督の後、再び薩摩へ。霧島神社で手水鉢を奉納。鹿児島で石拱橋8基架設(抱真橋改め永安橋、稻荷橋、前目鏡橋、大乗院橋、一ツ橋、黒葛原橋、戸柱橋、伊敷入佐出橋目鏡橋) | 1843(天保14)年 51歳 |
| 潟口船溜(指宿市)築造 | 1844(天保15・弘化元)年 52歳 |
| 大口堤防(伊佐市)築造、石拱橋3基架設(薩摩川内市の水の手橋と仏性橋、指宿市の港川橋) | 1845(弘化2)年 53歳 |
| 国分小村の新田開発(干拓)開始、甲突川に新上橋架設 | 1846(弘化3)年 54歳 |
| 甲突川に西田橋架設 | 1847(弘化4)年 55歳 |
| 国分小村の新田開発ほぼ完了、甲突川に高麗橋架設 | 1848(弘化5・嘉永元)年 56歳 |
| 甲突川に武之橋と河頭太鼓橋を架設 | 1849(嘉永2)年 57歳 |
| 甲突川に玉江橋架橋、八間川に江ノ口橋(薩摩川内市)架設し帰郷 | 1851(嘉永4)年 59歳 |
| 和歌山藩に招請され不老橋(和歌山市)架設。岩永三五郎幸安没、墓所は熊本県八代市鏡町 | |



石原 史彦「楠浦の眼鏡橋」
熊本県天草市

石橋のふる風

石橋に興味を持ち始めた頃、私は天草を訪れ、いくつかの石橋をカメラに収めた。その中でひととき興味を引かれたのが「楠浦の眼鏡橋」だった。大きく弧を描くアーチの曲線が素晴らしく、輪石の上に積まれた壁石が全体的にスリムなところも優美で、女性的な美しさが感じられた。上のサインペン画は、橋の下を流れる方原川を中央に、杉の木立や雑木林を背景に描いた。

（明治11）年。その前年には西南戦争が起つて九州各地が戦場となり、熊本城の天守も失われている。そんな不穏な時代を経て石橋架設を進めたのが楠浦村庄屋・宗像堅固である。その決意のほどが察せられる。天草産の石材を使い、地元の職人が架けたとされるが、アーチ橋を架ける技術を持った優れた石工や大工が地元にはいたことにも驚かされる。橋の周辺はよく整備されていることから、この石橋を地元の方々は今も大切にしていることが分かる。（2020年作品、サインペン画、文Ⅱ 石原史彦）

第42回大会 熊本県八代市で 5月15日(土)・16日(日)開催へ

2年ぶりの開催となる第42回大会は、新型コロナウイルス感染予防対策を講じ、熊本県八代市との共催で開催する予定です。同市は昨年、「八代を創造(たかや)した石工たちの軌跡」石工の郷に息づく石造りのレガシー」のストーリーが日本遺産に認定されました。

大会は2021年5月15日(土)・16日(日)、八代市新町の「桜十字ホールやつしろ」(やつしろハーモニーホール)の500名収容の会場を使用し3密を回避。例年の懇親会に代え、飲食なしで意見交換

会を行う予定です。

15日の記念イベントは次の内容で調整中です。▽八代市文化振興課担当者による

同市の日本遺産に関する講演▽熊本県文化財保護審議会会長の山尾敏孝氏(熊本大学名誉教授・石造文化財技術

機構理事長・当会相談役)による石橋の技術

に関する講演▽八代市東陽石匠館の上塚寿朗

館長(当会理事)の種山石工に関する講演▽日本遺産認定民俗芸能の披露。

16日の現地見学会は八代の石工たちが創造した石造りのレガシー(遺産)を訪ねます。▽八代に豊かな実りをもたらした石造りの干拓樋門▽地域の交通を支えてきた石橋群▽八代市東陽石匠館。



八代市東陽石匠館
=熊本県八代市

写真提供/中村まさあき

宿泊先は大会会場から1km圏内の八代グランドホテルを確保しました。コロナ禍の不確実な状況にあります。皆さまに安心して参加いただけるよう準備を進めます。(事務局)

日本の石橋を守る会 ～石橋とその文化を大切に～

会報98号(通算) 2021(令和)3年3月28日発行

代表者 会長 上塚 尚孝
事務局 〒861-3513 熊本県上益城郡山都町下市182-2
通潤橋史料館内 ☎0967(72)3360
HP <http://www.ishibashi-mamorukai.jp>
BBS <http://9328.teacup.com/jsbp/bbs/>

編集後記

祝・寄口橋架設100年。1・2面の取材では「八女上陽の『ひふみよ橋を守る会』」の方々の石橋を生かしたまちづくりへの熱意が伝わってきました。4・5面「石工の里櫟野歴史保存会」の取材では会の方々が石造物を丹念に調査されていることに関心しました。

先人の業績を顕彰することにより、当時の人たちの意識や価値観が想像でき、市井の人々の苦心や誇り、願いなども伝わってきます。時代が変わっても過去の歴史は現在とつながっている、そう意識するとき、長い時の流れの中で今を生きているという意識も芽生えます。それも文化財の持つ力ではないでしょうか。

(会報担当 中村まさあき)